

6

もうひとつの「日本音楽」—— 移民社会の音楽文化から 日系人及び非日系人による尺八音楽—— ブラジルでの実践から

ブラジルにおける日本音楽の研究事例として、日系人と非日系人における尺八文化を研究してきました。これは、尺八が箏や三味線といった他の邦楽器に比べて、最も早い時期に日系社会の枠を超え、一般のブラジル人に広まったためです。本稿では、ブラジルにおける尺八の文化的背景について、いくつかの重要な点に絞って述べます。

1 ブラジルの尺八の受容

1908年から始まった日本のブラジル移民の中には、尺八の重要人物もいました。例えば、1922年にブラジルへ移民し、ブラジルで最初の尺八奏者とされる小林美登利（1891～1961、明暗流および琴古流）や、1931年に移民した三好好実（都山流）、さらに1956年に移民した石見綱（1923～2012、琴古流尺八家元）などが挙げられます。

このように、昔から、日本の二大流派である琴古流と都山流、さらに日本民謡の伴奏として使われる民謡尺八は、移民者の間で維持され、次世代へと伝承されてきました。

日系社会では、江戸時代に存在していた虚無僧尺八の独奏曲である「古典本曲」の学習や演奏は少なく、主に「合奏」の曲が中心となっています。このため、箏や三味線、歌などとの共演の機会が多く、日系人同士の交流が活発になります。これは大切な意味を持ちます。合奏を通じて人々が集まり、コミュニティが形成されるのです。つまり、日系人にとって尺八は他の和楽器と同様に、共通の民族性を持つコミュニティを形成する「道具」としての役割を果たし、祖国の文化を維持するための手段でもありました。

2 フィールドワークをスタートする時点

フィールドワークを開始したのは、ちょうどブ

ラジルへの日本移民100周年記念の年である2008年でした。6月28日、サンパウロ市イピラプエラ公園内の日本館で行われた尺八の演奏会に足を運びました。この非日系人尺八奏者のダニエロ・トミックによる琴古流古典本曲を中心とした演奏会が、私の初フィールドワークの経験でした。その演奏会のプログラムの中には、トミックが石見綱と共に演奏する尺八二重奏《鹿の遠音》も盛り込まれていました。それが、当時85歳の石見の最後の公演となったのです。

石見は東京で生まれ、荒木古童三世（1879～1935）と四世（1901～1943）の弟子でした。1941年に「梅旭」を襲名し、流派を受け継ぎました。ブラジル移住後はサンパウロ市で尺八教室を開きました。トミックはサンパウロ市出身で、1989年に石見の教室に入門し、1998年に琴古流の免状と「梅京」を取得しました。このように、フィールドワークを進めていくうちに、尺八を実践している非日系人が多いことに気がきました。

トミックと同様に、家元制度の下で尺八を学んできた非日系人も何人かいますが、ブラジル社会では日本の組織に見られるような厳しい上下関係はあまりなく、ブラジル人にとってそのような人間関係を築くのは簡単ではありません。次に、家元制度ではなく、横山勝也（1934～2010）に伝承された古典本曲を学習している非日系人の音楽活動を見ていきましょう。

3 非日系人への尺八の広まり

尺八についての研究が深まる中で、私は尺八の音色に強く魅了されました。また、日本音楽が自分のアイデンティティと深く結びついていると感じるようになり、学術的な研究に留まらず、尺八の演奏の勉強も始めることを決意しました。当

時、インターネット上にはブラジルの日系人尺八の師匠に関する情報が殆ど掲載されていませんでした。一方で、尺八に興味を持つ非日系人たちは、いち早くインターネットを活用し始めました。

例えば、2004年から2014年まで公開されていたSNS「Orkut」では、サンパウロ州の非日系人ヴァデミル・ラモスが「シャクハチ・ブラジル Shakuachi Brasil」というオンラインコミュニティを設立し、メンバー数は200人を超えました。さらに、2009年には同じく非日系のマテウス・フェレイラが、SNS「NING」を利用して同名のコミュニティを開設しました。NINGのコミュニティには、尺八師匠の連絡先、尺八販売情報、演奏動画、演奏会の宣伝、運指法や楽譜などが多数共有され、尺八愛好者をつなぐ大切な手段となりました。現在、「Shakuachi Brasil」はSNS「Facebook」で活動を続けています。また、ブラジル南部のリオ・グランデ・ド・スル州では、ドイツ系ブラジル人で尺八を製作するエンリケ・ズルツバッハーもインターネットを通じて音楽活動を行っています。

このように、非日系の彼らはインターネットを駆使して生徒を集め、フェレイラはサンパウロに「吹禅尺八道場」を、ズルツバッハーはブラジル南部に「石苔尺八道場」という名の稽古場を設立しました。これらは、ブラジルで非日系人によって結成された初の邦楽団体でした。

彼らが学んでいた尺八音楽は、日系社会内で伝承されてきた琴古流や都山流ではなく、欧米で人気を集めていた横山による古典本曲の系統でした。この2人は、日本と欧米の尺八師匠から学び、ブラジルに横山系古典本曲を取り入れた開拓者となったのです。

私も古典本曲に強く惹かれ、インターネットを通じてフェレイラと知り合ったことがきっかけで、2009年に「吹禅尺八道場」に入門しました。当時、その道場の会員の中で日系人は私一人だけでした。日系社会の中心地であるサンパウロ市に

おいて、非日系人による尺八グループは、通常とは逆の意味で「マイノリティ」とも言えるかもしれません。

吹禅尺八道場と石苔尺八道場では、合奏曲ではなく、尺八独奏曲である古典本曲が中心となります。その理由は、古典本曲が江戸時代から虚無僧の修行のひとつとしてスピリチュアルな意味を持っていたためです。さらに、ブラジル文化には見られない、拍節が明確でない自由なリズムの曲であり、瞑想的な音楽として非常に魅力的だからです。

4 まとめ

非日系人による尺八の広がりや、欧米における尺八の国際化の影響を受けつつ、インターネットの活用が不可欠な手段となりました。インターネットやSNSが普及する以前、日本移民の過程では「人と文化」が同時に移動していましたが、現代においては「人」と「文化」がそれぞれ独立して移動し、「普及」や「維持」が可能となりました。その一例として、非日系人による横山系古典本曲の受容が挙げられます。

非日系の尺八学習者たちは、特定の民族的コミュニティをあえて作る必要がなく、主に独奏曲である古典本曲を演奏しています。それに対して、日系社会では合奏曲がコミュニティ形成において重要な役割を果たしています。

日系三世である私は、非日系人の尺八グループで吹奏を学び始めた後、尺八や箏、三味線を演奏する日系人の仲間も作りました。現在、日本で尺八の演奏や研究を行っている私にとって、ブラジルの友人たちと共に吹奏していた日々がとても懐かしく感じられます。

【参考文献】

瀬上ラファエル広志 (2020)『ブラジルにおけるジャポネジダダス形成としての尺八学習』東京音楽大学大学院音楽研究科博士論文 (東京音楽大学リポジトリ)

(瀬上ラファエル広志)